

## 全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

[14]

### ■ 第3章「制御不能」

ア版

14年(平成26年)6月1日(日曜日)

「俺たち、どうなつちゃうんですかね」。3月13日早朝、福島第1原発3、4号機の中央制御室で、補機操作員の林崎悟(24)に後輩が尋ねた。3号機では原子炉への注水が途絶えていた。彼らは事故発生からほとんど一晩寝ずに対応してきた。

制御室の当直班は当直長、副長、主任、副主任、主機操作員、補機操作員で構成される。原子炉を運転できるのは主機操作員となってからで、補機操作員は建屋内の現場に出ることが多い。

林崎は原発20キロ圏内の南相馬市で生まれ育った。地元の工業高校を出て入社、3、4号機に配属され6年

## 高溫の圧力抑制室

# “瞬時”に溶けた靴底

がたとうとしていた。本当にどうなつてしまうのか。不安を隠せない若手たちに声をかけたのは主任の高宮一美(39)だった。「僕らが対応することで3号機の爆発を食い止められれば、家族が住む町を守ってあがられるんじやないのか」

1号機爆発後、1、2号機制御室で当直長伊沢郁夫(52)が運転員から「ここにいて意味があるのか」と問われ、諭した言葉と同じだった。

午前5時15分、所長の吉田昌郎(56)は3号機格納容器から蒸気を放出するべントの準備を整えよう制御室に命じた。

たた3号機の場合、1号機と違つてベントをするための弁に手で回せ

るハンドルが付いていない。弁は圧縮空気で作動するタイプで、復旧班

と林崎ら制御室のメンバーが原子炉建屋内の配管にポンベを接続して弁

制御室の読みだった。全面マスクを

に空気を送り込んでいた。

「サブチャンバント弁を確認して手のひらが瞬間に熱くなりまし

た」林崎に指示が出た。復旧班が操作

を試みた弁が開いているかを確認す

くと呼ばれる通路に出ると、暑さで

意識がもうううとした。目標す弁は

すぐ近くにあつた。だが弁の開度計を見るにはキャットウォークの柵を

乗り越え抑制室上を5歩ほど歩かなければならぬ。

着けた林崎は後輩とともに真っ暗闇の建屋地下の柵の間から右足を出し、抑制室

に突入した。に置いた。抑制室につな

がる地下の扉をあつといふ間にゴム製の靴底が溶けた。高温の抑制室上にゴムの黒い

空気が流れ出た。高橋秀樹(敬称略。年齢、肩書は当時。共

「まるでサウ

同通信 高橋秀樹)



3号機と同型の5号機で、圧力抑制室の上にあるべント弁周辺を確認する作業員 2011年12月(東京電力提供)

14年6月1日 参加者